

平成22年 3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520270

研究課題名（和文） 白居易を中心とする中唐「風流」文学の展開に関する研究

研究課題名（英文） A study of the evolution of mid Tang' s *Fengliu* literature in China and Japan

研究代表者

諸田 龍美 (MOROTA TATSUMI)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：20304701

研究成果の概要：

中国の中唐時代を代表する詩人白居易は、恋愛詩の傑作「長恨歌」によって広く知られており、平安朝を中心とする日本文学にも多大な影響を及ぼしたが、そうした本質的な影響関係が成り立ち得た背景には、「風流・多情・好色」の美意識を基軸とした、両国の〈文化における共通性・同質性〉が存在したことを、多様な資料および論拠によって明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	330,000	2,230,000

研究分野：中国文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：白居易・風流・多情・好色・比較文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 中唐の著名な詩人白居易は、「長恨歌」の作者としても有名であり、その詩文集たる『白氏文集』は、彼の生前から遣唐使らによって日本にも将来され、奈良・平安朝の文学に、本質的かつ広汎な影響を与えてきた。

(2) 従って、中国のみならず日本においても、白居易の文学に関する論考はおびただしい。日本の近代以降に限定して数えても、

他の詩人・文学者を圧倒する数の論考が、白居易に関して発表されてきた（『白居易研究講座 第七巻』勉誠社・全7冊参照）。

(3) しかし、そうした研究状況にあつてすら、研究代表者が対象とする「白居易を中心とした中唐の文学と『風流の美意識』との関連」については、未だに本格的な研究は出現していない。

2. 研究の目的

中唐文学の顕著な特徴として、男女の恋愛を肯定的に評価する「風流の美意識」が確立し定着した点を挙げるができる。

- (1) 本研究の目的は、その中心的役割をになつた白居易や元稹の文学作品、就中、「長恨歌」や「鶯鶯伝」が、宋词や元曲など、恋愛を主題とするその後の中国古典文学に多大な影響を与えたことを明らかにすることにある。
- (2) また、中唐の「風流の美意識」は、奈良から平安にかけての国文学史の展開にも多様な影響を及ぼしたが、中でも、『伊勢物語』から『源氏物語』に至る、所謂「色好み文学」の形成と主題の深化に本質的な影響を与えていたことを論証する。
- (3) さらに、馬致遠の元曲『江州司馬青衫泪雑劇』の、初の本格的な訳注稿を完成させることも、本研究の目的である。

3. 研究の方法

- (1) 中唐の「風流」文学の代表的作品である白居易の「長恨歌」が、明清に至る、その後の中国恋愛文学に、どのような影響を与え、いかに受容されたのかについて、「多情」の二面性（汎愛と専愛）を視座としながら考察する。
- (2) 「長恨歌」や元稹の「鶯鶯伝」が、奈良から平安に至る仮名文学（『万葉集』・『伊勢物語』・『源氏物語』等）に与えた影響について考察をすすめる。
- (3) 馬致遠「江州司馬青衫泪雑劇」関連資料を収集するとともに、訳注稿（初稿）を作成する。
- (4) 風流の美意識に関連するキーワード（風流・多情・好色・此恨など）のデータベースを作成する。
- (5) 大学等の機関に赴き、関連資料を収集すると同時に、関連分野の研究者から、研究テーマに関するレクチャーを受ける。

4. 研究成果

- (1) 本研究が明らかにした「白居易の本質」とは、一言でこれを表せば、「多情な官能の詩人」というものであった。これは、花房英樹氏の「生生の理」や、松浦友久氏の「身心の

『適』の希求」と、同質にして一連の概念であると推察される。私見によれば、「説理性」「日常性」「饒舌平易」「快適の追求」といった「白詩の特質」の多くは、この「多情な官能の詩人」という「本質」に由来する特徴であった。

- (2) 白詩の「説理性」は、その「多情さ」がもたらす様々な「感傷」を「理」によって統御＝無害化し、ある場合には「よろこび(快・適)」にすら転化させることによって、「官能の充足」を保全する手段であったと思われる。「日常性」や「饒舌平易」といった特質も、空想ではなく、実感として情の動いた——その意味で「官能的」な——対象を、広く詩に詠じる「多情さ」に由来するであろう。
- (3) 詩の源泉となる「感情」には、「喜」「怒」「哀」「楽」等、さまざまな種類がある。その中で、白居易の詩には「よろこび」を詠じた作品が、殊のほか多い。それはおそらく、「(感情)は「身体」と不可分である、という実感および認識を、白居易がことさらに深く抱いていたことと、密接に関連する現象であろう。「身体」は、本能的に「快・適(=よろこび)」を希求するからである。
- (4) さらに、白居易にあつては、こうした「自身の生命の充足」は、(動植物をも含めた)「他者の生命の充足」と、一連のものであった。そうした認識の根底には、「与元九書」などという、「情(と気)は一なり」との確信が潜在している。この、いわば「情のものと平等」とも称すべき観念が、白居易の「やさしさ」の源泉に他ならない。「不遇な炭焼きの老人」(「売炭翁」)や「落魄の妓女」(「琵琶行」)を憐れみ、男女の情愛にも深い共感を寄せた白居易。彼の、こうした、「物のあはれ」を知る「多情な官能の詩人」としての本質は、諷諭・閑適・感傷の類別を一貫して顕現している。

- (5) 中でも恋愛詩(艶詩)は、そうした特質が、最も顕著に発揮された分野の一つであった。本研究の主要な対象であった「長恨歌」こそは、その恋愛詩の最高傑作にほかならない。その意味で、「長恨歌」を考察することは、白居易の「本質」を究明することに、直結していたのである。
- (6) 中唐においては、優れた艶詩を作成し、男女の情愛にも共感的な態度を持した「風流才子」こそが理想の男性とみなされた。「好色」であることは、歴代の儒家が強く否定する属性であったけれども、中唐期には、それすらも、「風流」として肯定する風気が、妓席を中心に醸成されていたのである。士大夫たちは、こうした時代思潮の中で、さまざまな「恋愛」を体験し、恋情の「魅力と魔力」の双方を、深く認識するようになっていった。
- (7) 近時、多くの歴史的・文学的研究によって、中唐期(九世紀)こそが、唐文化の爛熟期であったことが明らかにされつつあるが、「恋愛の実態」や「恋情の認識」においても、白居易の生きた中唐は、わが平安朝や江戸期の文化にも比肩し得る「成熟」を実現していた。
- (8) 「長恨歌」という作品は、「多情な官能の詩人」たる白居易の資質と恋愛体験をまっぴらで初めて生み出された傑作ではあるが、それが大流行をみたのは、中唐に成熟していた「風流の美意識」と正しく合致するような作品として、それが詠じられていたからに相違ない。白居易は、「長恨歌」の主人公である「玄宗と楊貴妃」を、「風流にして多情な」人間、すなわち、中唐の若き士大夫や妓女たちが切実な共感を抱けるような「身近な人間」として形象化した。それが「長恨歌」の大流行をもたらした主因なのであった。
- (9) 帝王と貴妃という存在が作品にヒロイックな華やぎを与え、五十年という時の経過が、生々しい現実を美化する働きを持ったにせよ、中唐の人々にとって、「長恨歌」は、本質的に、「過去の物語」ではなく、正に「現代文学」として、受けとめられたのである。
- (10) 管見によれば、「長恨歌」は、単純な「恋愛讃美の叙事詩」などではなく、「国を傾け生死を越えて貫徹される男女の情の、美しくも戦慄すべき魔力」を詠じた作品であった。中唐の士大夫や妓女たちの多くは、そうした作品の深層を感受し得るだけの感性と体験とを、この時すでに獲得していた。
- (11) すなわち、中唐の社会は、「恋情の魅力と魔力」の双方を、深く受けとめるだけの「成熟」を成し遂げていたのであった。この成熟が生んだ「風流の美意識」を母胎として、恋愛を主題とする「伝奇小説」や「詞」文学、また後世の「戯曲」なども、生み出されていったものと推定される。
- (12) このように、後世の中国文学を育む大きな母胎の一つともなった「風流の美意識」が、この時代に醸成されたという一点に鑑みても、やはり、中唐は「一大転換期」と称するに相応しい時代なのであった。
- (13) 「長恨歌」が中国恋愛文学史上の画期的作品として、以後の中国恋愛文学に多大な影響を及ぼした要因は、該作が、冒頭句に象徴される玄宗の〈汎愛的多情性〉と、結句に象徴される〈専愛的多情性〉という、〈多情の二面性〉を併せ持つ作品であった点が、特に重要であったこと。
- (14) 「俗化、女性化、恋愛化」を特徴とする中唐の文化は、「女流文学」を育んだ平安中期の文化と、本質的に共鳴するものであること。
- (15) 中唐と平安朝に開花した恋情文学は、共に「色好みの力(多情)」と「文芸の力(多才)」とによって紡ぎ出された作品(テキスト)という点において、本質的に一致し、互いに共鳴するものであること。
- (16) 白居易の「李夫人」「長恨歌」と、『源氏物語』との密接な関係は、中唐と平安朝とに見られる、文化の本質的な共鳴を、最も典型的に示す事例であること

- (17) 『源氏物語』の主人公光源氏の形象は、中唐期に生まれた「風流才子」の形象から影響を受けていること。
- (18) 奈良朝から平安中期に至る間の「美意識およびその変遷」は、〈好色の風流〉や、それを母胎に育まれた〈多情性〉という、中唐の「美意識やその変遷」と、本質的に相呼応する現象であること。
- (19) 『伊勢物語』初段の「みやび」は、そうした東アジア文化のダイナミズムの中で再検討される必要があること。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計13件)

- ① 諸田龍美、伊勢物語〈みやび〉再考—東アジア〈文化ダイナミクス〉の視点から、竹林舎『伊勢物語 成立と享受』、査読無、279-297頁、2008。
- ② 諸田龍美、風流才子としての光源氏—詩歌の境界を越えて、アジア遊学、査読無、巻116、26-33頁、2008。
- ③ 諸田龍美、〈もののあはれ〉の淵源—「若紫」の密通と「鶯鶯伝」、和漢比較文学、査読有、巻40、57-70頁、2008。
- ④ 諸田龍美、「長恨歌」よりみた中国「多情」文学の展開—〈汎愛・好色〉篇—、愛媛大学法文学部論集人文学科編、査読無、巻24、87-110頁、2008。
- ⑤ 諸田龍美、中唐恋情文学と国文学の展開—〈好色・色好み〉篇、愛媛大学法文学部論集人文学科編、査読無、巻23、147-177頁、2007。
- ⑥ 諸田龍美、中国における「多情」文学の展開—「長恨歌」を視座として、白居易研究年報、査読有、巻8、23-41頁、2007。
- ⑦ 諸田龍美、中唐恋情文学と国文学の展開—〈風流・みやび〉篇、愛媛大学法文学部論集人文学科編、査読無、巻22、77-140頁、2007。
- ⑧ 諸田龍美、白居易恋情文学の研究、博士(文学)学位取得論文(九州大学)、査読有、1-400頁、2007。
- ⑨ 諸田龍美、尾崎紅葉『多情多恨』と「李夫人」「長恨歌」、人文学論叢、査読無、巻8、1-10頁、2006。
- ⑩ 諸田龍美、「俗なるもの」の興起—中唐恋

情文学と平安朝かな文学の共鳴—、アジア遊学、査読無、巻93、46-56頁、2006。

- ⑪ 諸田龍美、中唐における「恋愛」の成立と展開—白居易を中心として—、愛媛大学法文学部論集人文学科編、査読無、巻21、25-61頁、2006。
- ⑫ 諸田龍美、恋情の復権—「哀江頭」から「長恨歌」へ—、愛媛大学法文学部論集人文学科編、査読無、巻20、125-149頁、2006。
- ⑬ 諸田龍美、“発展史観”的陥穽—趙令畤『商調蝶戀花』与北宋“風流”—、中国古代文学文献学国際学術研討会論文集、査読有、318-326頁、2006。

[学会発表] (計3件)

- ① 諸田龍美、日中古代文学的〈文化共鳴〉—中唐与平安朝的〈女性〉和〈恋愛〉主題比較、中国人民大学國學院講演会、2008年6月15日、中国人民大学(北京市)
- ② 諸田龍美、〈恋愛〉和〈女性〉的日中文学—中唐和平安朝的〈文化共鳴〉—、復旦大学中文系学術講演会、2007年11月20日、復旦大学(上海市)
- ③ 諸田龍美、平安初期における「色好み」の台頭—中唐恋情文学からの照射、和漢比較文学会第96回例会、2007年7月7日、法政大学(東京都)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

諸田 龍美 (MOROTA TATSUMI)
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：20304701

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者